

原村の地域おこし協力隊が発行するかわらばんのことです。
原村で暮らす、おもしろくて素敵なひとを紹介します。



「猟友会 女性メンバー」 大山 真裕さん（40）

千葉県出身。自然の中での広々とした暮らしを求め原村へ移住し、今年で3年目となる。約10年間調理師として働いていた経験を持つ。「猟友会」に入会して命と食に向き合っている。



命に生かされているということ
命をつないでいくということ

結婚後、東京で暮らしていた大山さんは都会での暮らしについて「窮屈で仕方がなかった」と話す。北海道で幼少期を過ごし、父に自然の中での遊び方を教えてもらったことが心に残っていたのかもしれないと大山さん。自然のある場所での暮らしを求めて原村への移住を決意し、今年で3年目となる。

ある日、「害獣として捕獲された鹿のほとんどは有効利用されずに捨てられている」というショッキングな新聞記事を目にした。

その記事を読むまで猟友会の存在も鹿が食べられるということも知らず、「生きている命がただ殺され捨てられるという現実が胸が苦しかった。せめて、美味しく食べて、自分の命の糧にしたいと思いました。」と語った。やらないで後悔するよりやってみようと猟友会への入会を決意。入会してまず最初に見せてもらった「鹿の解体」では、さっきまで体温を持って生きていた命を殺める切なさ、命をもたなくて自分が生かされているということを感じた体験でしたと教えてくれた。

大山さんは現在、「わな狩猟免許」を取得されている。わなは、人間と鹿の知恵や勘の勝負なので銃で撃つたりするよりもフェアだと感じたからだそう。「わなを仕掛けてもなかなか掛からないんです。鹿も必死で生きているんだなと感じました。」と猟の難しさを教えてくれた。

どうして猟に興味を持ったのか、そのヒントは大山さんが大学時代に恩師からもらった「いなごの佃煮」にあった。

買って食べるのではなく、自分たちの手で捕って食べるという、食べものが口に入るまでのプロセスが、自然との関わりを実感させてくれると話してくれた。

今後は「目の、手の届く範囲で生活がしたい。生活するために生きたい。」と話す大山さん。不便なことはたくさんあるけれど、自分にしか分からない感覚に丁寧に向き合うことで、自分の求めているものを捉えることができていると言う。

* 小柄な大山さんの笑顔からは、便利なものに頼りすぎず、自分の力でできる範囲で生きようとする逞しさが溢れている。

